

「縁・えにし」のよろこび

～真教寺・永代経法要～

先般、4月22日（月）～24日（水）の3日間、『真教寺・永代経法要』をお勤めしました。

『永代経』は、詳しくは『永代読経』といい、永代にわたってお経を読み、そのお心をいただいて参りましょう、という法要です。

ご講師に、ふくながじゅうしゅう福永充 証師（宮崎県西都市・光善寺）をお迎えし、阿弥陀さまのご恩と祖先のご恩に感謝し、「お念仏（南無阿弥陀仏）のお心がますますひろまるように」との願いのもと、お勤めさせていただきました。



講師：福永充証師

阿弥陀さまからのお手紙

『だいいじょうぶ、だいいじょうぶ』

佐賀・西福寺住職 片江哲海

先月で私は六十四歳になりました。平成十七年に脳梗塞を発症し、目には障害が残る身となりました。

幸いに運動をしてくださる方が見つかり、法事・布教は再開することができました。けれども、その翌年に再度の脳梗塞を発症しました。今度は脳幹部の梗塞で、命も危ないという状態となってしまいました。しかし、治療に着手するのが早かったため、八日間のICUでの治療で事なきを得ました。しかし、左半身に麻痺が残りに動けなくなりました。

一般病棟に移った直後、早めのリハビリが効果的という医師の勧めから、早速リハビリに着手しました。しかし、車椅子でリハビリルームへ移動するその途中、ガラスに写った自分の姿を見て呆然としてしまいました。

顔の左半分は緩み、左の口からはヨダレ、左手の指は結んだまま開かず膝の上に置かれている姿は忘れることができません。

最初の病院はリハビリの施設があまり整っていませんでした。リハビリ専門の病院に転院しました。六ヶ月後、無事退院して現役に復帰するほどの回復をしました。こう書けば簡単ですが、最初の二ヶ月程つらいことはありませんでした。リハビリは権利の回復ともいいます。「本来あるべき状態への回復」という意味だそうです。そ

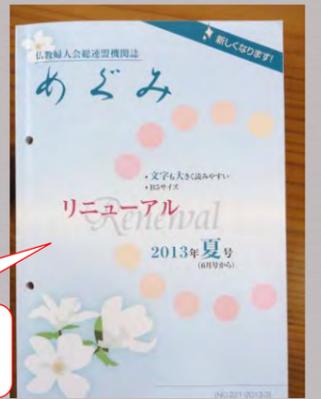
めぐみ（仏教婦人会総連盟機関誌）購読のご案内



年4回（6月、9月、12月、3月）発行されています。内容は、行事・活動の紹介、法話、み教えを学ぶ講座など。

購読希望の方は、お寺までご連絡ください。

※2013年夏号（6月号）からリニューアルされます！



「春の仏教婦人会法座」を開催いたしました

先般、3月26日（火）にお勤めいたしました。春のあたたかさに包まれ、講師の正木隆真師（佐賀基山町・善覚寺）のお取り次ぎに、阿弥陀さまお慈悲の御心を頂戴しました。次回は、秋の法座（10月）。仏教婦人会会員以外の方の参拝もOKです。どうぞお参りください。

ぶつきょうそうねんかい 仏教壮年会発足!

【発足の願い】

ぶつきょうそうねんかい 仏教壮年会とは、男性のご門徒を中心にして、様々な活動を行う会です。お寺が「あなたの居場所」となればと思います。

今後、詳細が決まり次第、随時みなさまにご案内もうしあげます。



のりハビリ中に、「こんなことやっても治らないのではないか」「これ以上やっても」と思うことが何度もありました。つらい日々は顔を暗くさせ、性格までもいじけさせます。家族が見舞いに来てても会話が弾みません。ままにならない身であり、思い通りにしゃべれないもどかしさで、あせりやいら立ちの日々でした。機嫌が悪く、わがままを言い、思い通りにならないと物を投げたりもしました。そのような中、甘えられるのは連れ合いだけでした。そして、そんな私を悲しそうな目で見ていたのが息子でした。

ある日のことです。面会時間の終了頃、息子が一人で見舞いに来てくれました。りハビリもうまくいかず、機嫌の悪い私に一冊の絵本を渡してくれました。幼稚園の図書室にあった本だそうです。「読んでみて」と言って、帰って行きました。しかし、「絵本なんて……」と思い、手にも取りませんでした。

消灯の時間がきてもあまり眠れません。「この先どうなるのか このままで終わるのか」と思いがめぐり、なかなか寝付けませんでした。そんな時です。枕元に置いてあった絵本を読み始めてみました。読み進めるうちに、涙がポロポロポロと止まらなくなりました。その絵本は「いとうひろし作絵」（講談社）の『だいいじょうぶ、だいいじょうぶ』という題の物語でした。内容は、おじいちゃんと孫の物語でした。

小さい頃の話です。おじいちゃんと孫のボクは、毎日毎家の周りを散歩しています。いろいろなことに出会います。楽しいことばかりではなく、困ったことにも出会います。でもその度におじいちゃんは、おまじないのようにボクの手を取

り、「だいいじょうぶ、だいいじょうぶ」と言ってくれる、という話です。終わりになると、孫のボクは随分大きくなり、おじいちゃんはすっかり年をとって弱ってしまっています。でも今度はボクの番です。おじいちゃんの手を取り、「だいいじょうぶ、だいいじょうぶ」と声を掛ける、という話でした。私は息子が大きくなって、あまり話らしい話も、改まった話もしたことがありませんでした。その息子が、焦り、いら立ち、母親に当たり散らす私を見て言いたかったのではありません。「けがをして泣き、病気をしたボクにお父さんは言ってくれていたでしょ。だいいじょうぶ、だいいじょうぶ」と。今度はボクの番と思ったのでしょうか。「だいいじょうぶ、だいいじょうぶ」と声に出しては言いづらく、恥ずかしさもあったのでしよう。でも言いたかった。負けそうな父、くじけそうな父に、一冊の絵本に託して「読んだら」と一声かけて帰って行った息子の気持ちを、ありがたく、ありがた

くいただきました。これまで私は布教の場で阿弥陀さまの「だいいじょうぶ、だいいじょうぶ」のおこころをお取り次ぎしてきました。しかし、大変な目に遭うとその心を忘れ、なぜ自分がと迷いかけた私に、阿弥陀さまの私を心配してくださる声を思い出させてくれたことでした。これではいけない、このまま終わってはいけない、と、りハビリに励むことができ、今日を迎えることができました。

※この法話を書かれた片江哲海師が、今年の秋の彼岸会 9月17日～19日のご講師です。

『大乗・みほとけとともに』（平成24年4月号）より